

## 文化活動で都市空間に活力を与える

野原 卓

### 「都市デザイン行政」トップランナーの次なる展開

横浜市は、日本でも先駆的に「都市デザイン」を掲げ、港町が放つ歴史文化を資源としながら、魅力ある都市空間を積み上げてきた都市である。1960年代以降の都市づくりの構想を皮切りに、飛鳥田市長（当時）の掲げる「6大事業」の1つ、「都心部強化事業」が、歩行者空間の再生を中心に行われ（くすのき広場、馬車道、イセザキモール、元町など）、1980年代から本格化する歴史資産を活かしたまちづくり（山手地区の洋館群、開港資料館の保全活用、旧・川崎銀行の外壁保存など）、そして、みなとみらい21を中心とした再開発など、いずれの事業も、横浜が積み上げてきた港町のイメージと魅力ある空間像を共有しながら、都市文化の創造を、ハードを中心に実行するという意味では、同じ目標に向かってきた成果である。しかし、開始から30年以上経過した現在、ハードとしての横浜港町のパーツはほぼ出そろってきたものの、その後の展開として、これらをつなぐ、あるいはこれらを使いこなすための鏡（かすがい）が必要とされている。

### ハードへのソフト充填——文化芸術創造都市構想

近年、この横浜の空間的魅力を基盤としたさらなる都市戦略として、文化芸術創造都市構想（クリエイティブ・シティ・ヨコハマ）を掲げた都市再生が進められている。これは、これまで市が積み上げてきたハード整備を基盤としながら、創造的活動というソフト戦略を重ねることで再生を図るものであ

る。1990年代以降、横浜の都心部も他都市と同様に空洞化が進展しており、ハードによる都市戦略が効果を発揮しなくなりつつあった。みなとみらい線開通により、当初目標とされていた商業業務の賑わい創出から住宅による都心居住へと姿を変えた再生は進みつつあるが、いま一度、横浜市の中心部としてあるべき「複合的都市機能」や「賑わい」という原点を見つめ直すという側面が背景にある。構想を要約すると、以下の通りである。

1. クリエイティブ・コア：歴史的建築物・倉庫・空きオフィスの再生、クリエイターへの創造活動支援
2. 映像文化都市：成長の期待できる映像産業の推進
3. ナショナルアートパーク構想：みなとみらいから山下ふ頭までのウォーターフロント一帯の文化拠点への再生（開港150周年、横浜トリエンナーレなどを契機に）、山下ふ頭（横浜トリエンナーレで使用）、象の鼻・大さん橋から日本大通り（象の鼻地区の再生、日本大通りでのオープンカフェ）、馬車道から北仲地区・新港ふ頭（北仲地区の再生など）まで、特に港湾地区を中心に横浜の歴史文化を活かした空間づくり

### 「実践」の中の「実験」——BankART1929事業

構想の実践に向けて、まずは、歴史的建造物活用実験事業「BankART1929」が推進された。これは、馬車道境界の2つの歴史的建造物である「旧・第一銀行横浜支店」「旧・富士銀行横浜支店」の活用実験として行われた文化芸術創造プログラムである。いずれも古くから横浜都



BankART Studio NYKの夜景



ナショナルアートパーク構想

心部に聳え立つ荘厳な銀行建築であったこと、1929年がこれらの銀行設立年であったこと、そして、この年がMoMA展開催の年でもあったことから、Bank+ART+1929で、「BankART1929」と名づけられた。このプロジェクトは、文化芸術創造の拠点としてはもちろんのこと、これらを用いながら、中心部の再活性化プログラムという側面も併せて計画されていたところが特徴的である。

旧・第一銀行（BankART1929 Yokohama）、旧・富士銀行（BankART1929 馬車道）には、いずれも、イベントスペース、ホールだけでなく、クリエイターのための工房スペースなど、芸術文化を育てるための空間が用意された。旧・第一銀行については、先端バルコニー部分を移築（曳家）保存、外観は形態復元、内部空間は、当時のイメージを再現する形で再生された<sup>14</sup>。BankART1929 馬車道については、2005年度より東京藝術大学大学院映像学科が使用することとなったため、その後、新たに旧・日本郵船倉庫をBankART Studio NYKとして利用している。

もう1つこの事業が特徴的だったのは、所有・管理・運営のシステムである。原則としては民間の所有する低・未利用施設を市が借り受け（BankART1929のケースのみ市が所有）、場所代を市が負担しつつ、管理運営については、コンペにより選出された事業運営団体（NPOなどを想定）が行う。加えて、この団体がBankARTとして独自に収益事業を行うことでマネジメントしてゆく、いわば、「民有・公借・民営」とも言えるシステムである。

### 積み重なる都市戦略の「連鎖」

横浜市のこれからの再生課題は、市民が気軽に入ることのできなかったウォーターフロントを、文化芸術による再生を通して開いてゆくことであり、そのためにはハードとソフトが一体となった空間づくりによる都市戦略の連鎖がより一層重要となる。

山下ふ頭では、港湾機能の低下により低・未利用化した倉庫のあるふ頭西側を中心に、横浜トリエンナーレ開催を契

|          |  |
|----------|--|
| 1960年代   | 6大事業の計画（飛鳥田市長）                             |
| 1971     | 企画調整局内に都市デザイン担当設置                          |
| 1970年代   | 都心再生（くすのき広場[1974]、馬車道[1976]、イセザキモール[1978]） |
| 1988     | 歴史を生かしたまちづくり要綱                             |
| 1990年代以降 | 都心再整備（汽船道[1997]、日本大通り[2002]、赤レンガパーク）       |
| 2004     | 文化芸術創造都市構想（中田市長）<br>BankART1929事業（本格）実施    |
| 2009     | 横浜港開港150周年                                 |

機としながら、既存倉庫の特徴でもある大空間を活かした映像スタジオなどの創造的産業育成が図られている。

象の鼻—日本大通り地区では、横浜開港の起点である象の鼻空間の再生が課題となっており、開港150周年である2009年に向けて、象の鼻広場を中心とした再生整備が実施されている<sup>12</sup>。また、日本大通りでは、これまで、オープンカフェ実験が行われ、この成果をもとにして、道路上に常設オープンカフェ<sup>13</sup>が設置され、賑わいを生み出している。

馬車道・北仲・新港ふ頭地区では、検査所や倉庫などの港湾資源も多く、民間の活力を利用しながらの再開発が計画されている。特に、再開発実施前の倉庫・事務所空間を暫定的に貸し出す事業など、面白い試みも展開されている<sup>14</sup>。

さらに、こうした連鎖の都市デザインを行うことが可能であったのは、企画調整局あるいは都市デザイン室という横断的な庁内組織の存在が大きい。都市デザインに関わる情報全体が集まるマネジメントの仕組みが、「連鎖」を実現するために重要となる。

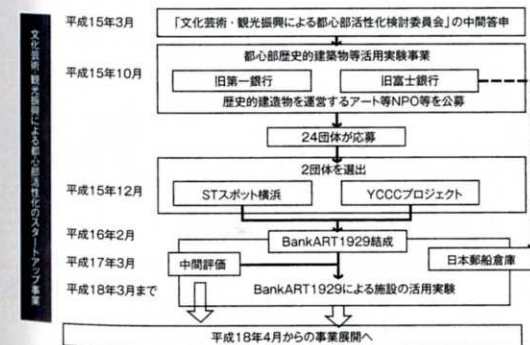
### 注

<sup>11</sup> 保存設計は横文彦氏。現在、再開発事業主体の都市再生機構が所有しており、市は実験事業として借りている。

<sup>12</sup> 2006年には、象の鼻地区再整備プロポーザルが実施され、現在、整備が進められている。

<sup>13</sup> 店舗が営業していないときは、パラソルなどの付属物は撤去する取り決めとなっている。管理は、日本大通り活性化委員会により行われている。

<sup>14</sup> 北仲BRICK（旧・帝蚕倉庫本社ビル）と白い外観を持つ北仲WHITE（旧・帝蚕ビルディング）は、1年半の期限つきとして格安で賃貸され、クリエイターなどの集積によって賑わいを見せた（2006年度に終了）。



BankART1929事業展開計画のフレームワーク